

【暗証聖句】「なぜならキリストは、まことのものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所にはなく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の御前に現れてくださったからです。」ヘブライ人への手紙 9：24

【今週のポイント】かつて地上に聖所があったとき、神様の臨在に触れて死んでしまうということがありました。神様はあまりにも聖なる方であり、それに対して私たちはあまりにも汚れているからです。しかし、イエス様のおかげで私たちはいま、天の聖所におられるに神様のもとに大胆に近づくことができます。

【日・父なる神の御前に入るイエス】

「なぜならキリストは、まことのものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所にはなく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の御前に現れてくださったからです。」ヘブライ人への手紙 9：24

イエス様は地上の聖所は、天にある本物に比べれば、単なる人間が作った写しに過ぎないと強調されています。これは天にある本当の聖所がいかにも聖なる素晴らしい場所であるかということでもあります。父なる神様がおられるのですから、当然のことです。イエス様は死から復活された後、天に戻られ、神様の御前に現れてくださいました。大切なのは、それが「わたしたちのため」であったということです。つまり、罪びとである私たちが、神様の御前に受け入れられて、御許に近づくことができるためであったということです。遺言者が死ぬことによって遺産が譲られるように、キリストの死は契約の祝福の獲得を確実なものとししました。

古代イスラエルにおける巡礼の目的は、「神の御顔を仰ぐこと」でした。詩編 42 編 3 節に次のように書かれています。「神に、命の神に、わたしの魂は渇く。いつ御前に出て神の御顔を仰ぐことができるのか」。神の御顔を仰ぐとは、神様に正しさが認められ、神様の好意を得る経験を意味しています。また「神の御顔を求める」という表現は、神様に助けを求めることを意味しています。この神の御顔を仰ぎ求めるということ、イエス様が天において、私たちの先駆者としてなしてくださったということです。

【月・神の招き】

ヘブライ人への手紙 12 章 18～21 節「あなたがたは手で触れることができるものや、燃える火、黒雲、暗闇、暴風、ラッパの音、更に、聞いた人々がこれ以上語ってもらいたくないと願ったような言葉の声に、近づいたのではありません。彼らは、「たとえ獣でも、山に触れれば、石を投げつけて殺さなければならぬ」という命令に耐えられなかったのです。また、その様子があまりにも恐ろしいものだったので、モーセすら、「わたしはおびえ、震えている」と言ったほどです。」

ヘブライ人への手紙 12 章 18～21 節にかけて、イスラエルがシナイ山で律法を授けられるときの光景を思いおこし、神様の御前に入ることは簡単なことではなく、モーセさえおびえ、震えたほどだったと書かれています。神様がシナイ山で神聖を表されたのは、民に神様を畏れ敬うことを教えるためであり、同時に憐み深く恵みに富む方であることを学ばせるためでした。

出エジプト 19 章を見ると、神様と出会うために民たちはまず身を清めなければならず、準備せずに山に登ると死んでしまうのでした。そして角笛を長く吹き鳴らしているときにだけ山に登ることができました。神様は民たちと共に食べたり飲んだりして交わることを望まれましたが、神様から語りかけられても人は死なずにいることができました。しかし、神様からの招きに対してやがて民たちは主の御前に入ることを恐れるようになり、モーセに自分たちの仲保者になってくれるように頼みます。これは罪を自覚するゆえに恐れたのでしょう。

【火・幕の必要】

ヘブライ人への手紙には「幕」という言葉がたくさん出てきます。聖所における幕とは、庭の周囲を囲む幕や入

口にかかっている幕と、聖所と至聖所を分けるための幕の2つがありました。いずれに場合も一部の人だけが通り抜けることができる入り口の役割がありました。なぜ仕切る必要があったのかといえば、誰でも自由に入ることが許されていない、それは死を招くこと可能性があったからです。

「アロンの二人の息子が主の御前に近づいて死を招いた事件の直後、主はモーセに仰せになった。聖所に入り、契約の箱の上にある贖いの座に近づいて、死を招かないように。わたしは贖いの座の上に、雲のうちに現れるからである。」レビ記 16：1、2
アロンの二人の息子ナダブとアビブは、主の御前に近づいて主が命じられたものではない火をたいたために、主の怒りに触れ、主の火によって焼かれて死んでしまうという事件が起きました。主がご臨在される聖所における、主の御前において主を軽んじた結果でした。この事件の直後に、主はモーセに対して、「契約の箱の上にある贖いの座に近づいて、死を招かないように」と言われたのでした。モーセでさえ、このように厳しく言われていることを考えると、本来主の御前に軽々しく出られるものではないことがよくわかりますし、そのために聖所に幕を設けられたのでした。

【水・幕を通して入る新しい生きた道】

ヘブライ人への手紙 10 章 19～22 節 「それで、兄弟たち、わたしたちは、イエスの血によって聖所に入れると確信しています。イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通して、新しい生きた道をわたしたちのために開いてくださったのです。更に、わたしたちには神の家を支配する偉大な祭司がおられるのですから、心は清められて、良心のとがめはなくなり、体は清い水で洗われています。信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか」

地上の聖所は幕で仕切られ、誰でも簡単に近づけるものではありませんでした。大祭司でさえ、勝手な時に入れば、命の危険が伴うと警告されているほどでした。ところが、天における本物の聖所に、キリスト者たちは大胆に入っていくことができると言うのです。神様のもとに近づいていくことができるということです。本物の写しに過ぎなかった地上の聖所でさえ、神様の臨在にほんの少しでも触れれば死んでしまうかもしれなかったのに、なぜ天にある本物の聖所において、私たちが神様の御前に立つことなどできるのでしょうか。それはキリストの血によって清められているからです。キリストによる贖いの犠牲により、今まで存在していなかった神様のもとに続く新しい生きた道が生まれたのです。神様との間を仕切る垂れ幕は、イエス様のお体で象徴されるものです。つまりイエス様を信じる者たちだけが、イエス様ご自身を通して、父なる神様のもとに行けるのです。なぜなら、イエス様はご自分の血によって、私たちの罪を完全に清めてくださったからです。心も体も清められており、もう良心をとがめるものはありません。だから、主を信頼しきって、恐れることなく、神様に近づくことではないかとすすめられているのです。

【木・彼らは主の御顔を見る】

ヘブライ人への手紙 12 章 24 節「しかし、あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、天に登録されている長子たちの集会、すべての人の審判者である神、完全なものとされた正しい人たちの霊、新しい契約の仲介者イエス、そして、アベルの血よりも立派に語る注がれた血です。」
私たちはいま信仰により何に近づいているのか、正しく理解する必要があります。それは「シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり…」とあるように、天の御国に近づいているのです。イエス様の血によって清められたものだけが近づくことの出来る世界です。これが本当に実現するのは未来のことですので、その意味では、天の御国に近づいているとの保証となるみ言葉と理解することができます。しかし同時に、霊的には限りなく天国に近づいたとも言えます。これはイエス様の十字架以前にはありえないことでした。私たちが近づいている御国、そして父なる神様から迷い出ることのないようにしたいものです